

書評

〔評者〕
井村 洋
飯塚病院総合診療科



病棟レジデント、病棟医のための 高齢患者診療マニュアル

下門 顯太郎 編

● A5変形 頁276 2013年
定価：本体4,500円＋税
[978-4-89592-755-0] MEDSi 刊

本書は、「高齢者に対する病棟診療」という新たな切り口のマニュアルである。A5変形276頁に、高齢者の病棟診療に必須の項目が、適切な量で、具体的・実践的な語り口で収められている。

内容は、序章を除き3つのPartに分かれている。それぞれ、「老年症候群」「各疾患に関連して考慮すべきこと」「知っておくべき状況」である。

「老人症候群」は、さらに11の項目で構成されている。低栄養、ふらつき、転倒・骨折、認知機能低下、うつ・不眠、妄想、せん妄、意識障害、褥瘡、掻痒、痛み、である。従来の内科書では脇役の感があったが、高齢者ケアにおいては中核となる症状であり、これらの病態について解説が記されている。

「各疾患に関連して考慮すべきこと」では、網羅的ではなく、肺炎、貧血、低ナトリウム血症、甲状腺機能異常、糖尿病、冠動脈疾患、心不全、心房細動、心臓弁膜症、末梢動脈疾患、胃食道逆流症、急性腹症、腎機能障害、排尿障害、ANCA関連血管炎の15疾患に限定されている。頻度と重要度(介入の価値が高い)が高いものを選択したのであろう。

「知っておくべき状況」では、漢方治療、外科手術、終末期医療が取り上げられている。

いずれの項目も6～11頁で記載されており、アウトラインは「チェックポイント」「症例提示」「解説」「症

例の経過・転帰」「症例から学ぶこと」と定型的である。また、「高齢の入院患者を診るには特殊なスキルが必要」という視点で全体が編まれており、総勢31名による執筆とは思えないほどの統一感がある。このため、充実した内容にもかかわらず、スピーディに読み進めることが可能である。

「こんなところが、高齢者診療のツボなのだよ」と、熟練の指導医からの手ほどきを受けている気分にさせてくれるところが、本書の特徴である。また、「専門医に紹介すべし」という記述ではなく、紹介の目的や適応を明示している例のように、マネジメントを完結できるように記載されている点も、ありがたい。

高齢者診療に初めて直面する研修医は、まずは本書で該当する項目にあたってみることを勧める。今すぐ必要な知識が、ほどよい加減に解説されていることに感謝するであろう。上級医や指導医は、本書で用いられている内容と型こそが、教育講演で求められているものであることに気づくだろう。高齢者診療を行うすべての医師が、本書の知識を得たうえで協働しうる体制を再構築する必要がある。また、医師だけでなく、高齢者ケアに関わる医療・福祉・介護職も、医学的な知識を共有すべき時代である。本書には、多職種向けの講習会において伝えるべき内容が満載されており、私は活用させてもらう予定である。